

農業土木を支えてきた人々

袋井用水の創設者・楠藤吉左衛門

間 宮 慶*

I. はじめに

平和の世には文化の花も咲き競うものである。長かった戦国の世がようやく終って、時の権力者が力で築いた文化遺産は目をみはるものが多いが、江戸時代に進み、権力者文化から民衆的文化へと変遷してきた。とくに泰平を謳歌した元禄以降はその民衆文化がいよいよ咲き匂うとともに、士農工商の身分の固定化も進み、生活の安定と、反面詰めの気分から退廃へと続くものではあったが、経済面では商品貨幣経済の高まりとなり、これに伴って生産技術即ち農耕商工技術も大いに改革発展したものである。

一方、藩政時代の各大名はこの平和と文化の維持に腐心することにより、膨大な財政力を必要として各藩ではこの財源の補充確立の立場から各種殖産と、増加をたどる人口対策、食糧対策として食糧の増産が必然的に主要政策の柱となってきた。ここ阿波徳島藩でも有名な藍作の奨励とともに、新田開発が大いに促進され食糧の増産を図った後がうかがえる。いわゆる「米遣い経済」といわれた時代となり、米の増産は年貢の増徴に強く結びついて保護奨励が加えられ、新田の開発とともに溜池や用水の建設が大きく進んだ時代であり、また農具の改良あるいは、干鰹の金肥の施用による農耕技術の大いに発展した時代でもあった。

徳島藩において米作と関連が深く特筆すべき藍作は、いわゆる「阿波の北方」といわれる吉野川流域農業地帯で、通称中島23か村と呼ばれる地域で、名東**、名西、板野の各郡の吉野川沖積地域がその品質も最上といわれて生産地帯の中核となっていたものであるが、同じ名東郡でも鮎喰川右岸の地域ではこの藍作の実績がほとんど見当らない。藩主居城の徳島の城下町と指呼の間にある

この鮎喰川右岸では、優雅なように見える中に最も厳しい労働が強いられる藍作はおそらく政策上もまた治安上も不都合であって、この作業を直接見聞することははばかるように取計らったのではなからうか。とにかく吉野川北岸一帯、鮎喰川西岸一帯の地域が中核を形成したもので、藍大尽の逸話とか、またこの藍作に従事した多くの百姓奉公人の哀話を今に伝えている。

このような中で藩政時代を通じて農業用水も各所に開発されたものであるが、昭和28年(1953)徳島県史跡と認められた袋井用水の水源池に、この用水開設者として元禄の昔から今に至るもその名を人口に膾炙され、今後もお語り継がれるであろう楠藤吉左衛門翁の頌徳碑が静かに水源池を見下している。藍作のような派手な話題は乏しいが、地道で堅実な農村の指導者として農民に安心と経済力を与えて、その時代に即した薫り高い文化を大衆とともに豊かに築き上げ、終生黄金波打つ豊かな農村醸成の夢を追い続けたであろう偉大な先覚者、楠藤吉左衛門について、事績と人間像についての概要を述べる。

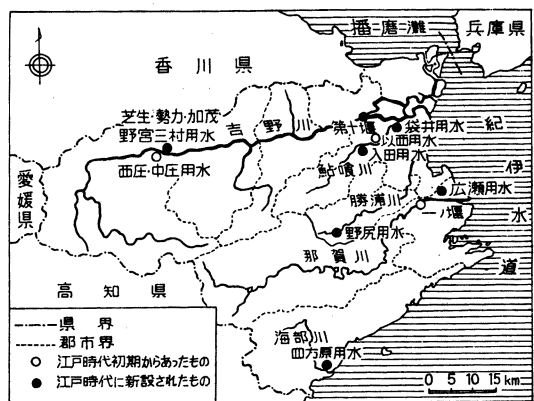


図-1 藩政時代のおもな用水

* 徳島県徳島農林事務所(まみや けい)

** 文中当時の地名で名東郡島田、庄、蔵本および東名東村と称するものは現在の徳島市島田、庄、蔵本、鮎喰の各町の旧称である。

II. 楠藤吉左衛門の業績と袋井の流れ

1. 業 績

楠藤吉左衛門の業績、偉業はすべて楠藤翁頌徳碑に表わし尽くされている。よってその全文を掲載してご理解いただきたい。

楠 藤 翁 頌 徳 之 碑

名東郡島田、庄、蔵本三村ハ昔時水利乏シク旱害殊ニ甚シ 島田村ノ豪農楠藤吉左衛門翁夙ニ之ヲ憂ヒ自ラ奮テ村民救済ノ志ヲ立テ寢食ヲ忘レテ事ニ従ヒ夜ハ田畝ノ間ニ臥シテ静ニ伏流ノ音ヲ尋ネ晝ハ低地ヲ試掘シテ百万水脈ヲ求メ尚ホ神仏ニ祈リテ冥助ヲ請フ 人以テ狂トナス 翁顯ミス久シウシテ遂ニ比地ニ一大源泉アルヲ覺リ元禄五年長二日間幅十間ノ用水池開鑿ヲ設計シテ藩庁ニ請フ 藩庁其規模ノ大ナルヲ危ミテ之ヲ卻ク 翁再三歎願七年正月ニ至リ長百間ヲ限リ始テ許サル乃チ開鑿ニ著手ス 既ニシテ指定ノ工程ヲ終ヘタルモ水量予期ニ及ハス吏怒テ之ヲ責ム 翁意氣屈セス終夜其処ヲ去ラス審ニ地下ノ水声ヲ察シ翌日藩庁ニ走り哀訴シテ白ク 更ニ長百間ヲ増シ且深一尺ヲ加エシメヨ功若シ成ラスンハ甘シテ死ニ就カンノミト辞氣懇切藩庁其志ニ感シテ工事ヲ続行セシム 掘ルコト尺余果シテ清水アリ混濁トシテ涌キ出ス 翁狂喜措ク能ハス感泣シテ地ニ倒ルトユフ実ニ元禄12年7月ナリ

翁是ヨリ本流ヲ疏シ支脈ヲ通シ子孫三代其業ヲ継テ遂ニ克ク完成セリ 世ニ袋井用水ト称スルモノ即チ是ナリ爾來三村ノ灌溉永ク其利ニ頼リ後人復旱害ヲ知ラサルモノ皆翁ノ惠澤ナリ其功績偉ナリト請フヘシ 大正八年拾壹月拾五日朝廷其功ヲ追褒シテ從五位ヲ贈ラル 此ニ於テ三村ノ有志相謀リ碑ヲ建テ文ヲ刻シ上ハ聖恩ノ萬一ニ對ヘ下ハ翁ノ功德ヲ無窮ニ伝フト云爾 辻信太郎書

大正拾年辛酉年杳月

以上 500 字の流麗な刻文によってそのすべてを知ることができるものであるが、この碑文と併せ文献古言あるいは当時の状況などを調べる時、江戸時代における新田開発や用水事業は、その初期は藩主藩士で行われ、中期以降は百姓の代表の肝煎や庄屋によって行われている。この袋井用水も元禄文化の中で島田村肝煎の名で行われた日本農業史の一頁を飾る偉業である。

2. 袋井の水の今昔

(1) 昔の袋井 農業における水利用の過程は稲作の歴史でもある。当時の技術で利用可能水はほとんど稲作に使用しつくしたものといえる。これを成し遂げた先覚者の労苦は驚異に値するものである。農業における水の利

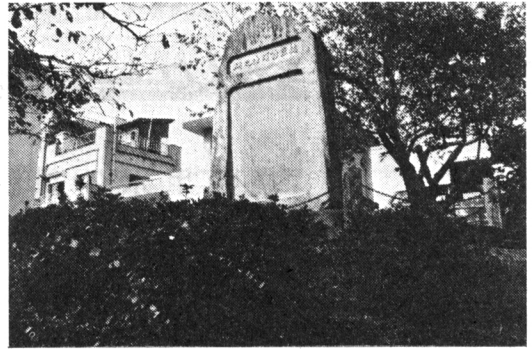


写真-1 頌 徳 碑

用はこうした状況にありながらも稲作とともに先人たちの築いた水利秩序によって近代まで比較的安定的に支えられてきた。また農業用水は農家を主体とした「むら」全体の生活用水あるいは他産業用水としても、その土地の風土に巧みに馴染んで人工でありながらあたかも自然の一部であるかのように親しまれて、豊かな水を流し続けて農村の生活文化を築き上げてきたもので、袋井用水もそのとおりであった。

三方を堤に囲まれてちょうど袋の口から水が出るようだというので名づけられたというこの袋井用水も、元禄年間（7～12年）楠藤吉左衛門によって水源池が開削され、子孫3代にわたって下流水路が延々と築造されて以来幾星霜、日量8万 m^3 といわれる湧水は水煙あるいは湯煙を伴って滔々として湧き、かつ流下されて地域住民すべての人々に親しまれてきたものであり、この流域で育った者にとっては心のふる里であった。徳島歴史散歩には、清流湧き出た「宝の袋」と題して、大要次のように美しく親しみを示している。

“流れも清き袋井の、と校歌にまで慕しまれた袋井用水が敷地内を流れる徳島市加茂名小学校あるいは幼稚園から今日も「うさぎ追いかの山、こぶな釣りしかの川、夢は今もめぐりて…」と幼いころの何か心にひびく歌声が聞えてくるが、ここ袋井用水もそのなつかしい歌詞の例外ではない。元禄7年島田村の庄屋吉左衛門が決死の覚悟で7年の才月と多大の家財を犠牲にしたうえ3代継続事業として下流の田宮川までの水路と水源を完成した。以降干害に苦しんだ島田、庄、蔵本3村300町歩の水田をうるおし、はかり知れない恩恵を与えたほか、多量の湧水は村を浄化し、多くの水車を動かして生活を支え、又舟を浮かべスイカを冷やして魚釣りに螢狩りに四季を通じて地元民のいこいの場であり、石鹼を使う洗濯物以外の米、食品等の生活用品の洗物、洗面あるいは用心水にと昼夜の流水によって文明を生み、水なくして人

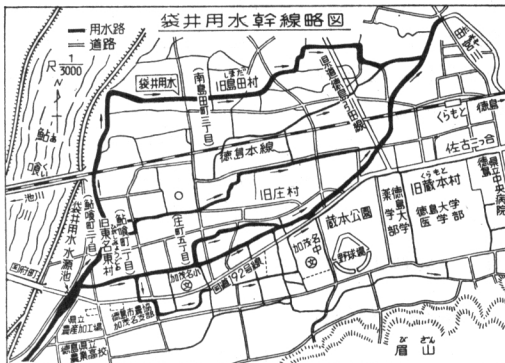


図-2 袋井用水幹線略図



写真-2 水源池付近

の生活はあり得ない歴史を示した宝の袋の池である”と。

(2) **今の袋井** 徳島市にはこの袋井用水と対峙して東西に美しい眉山がある。この山頂から現徳島市の全域が望めるものであって袋井用水受益地の鮎喰川、吉野川左岸一帯もちろん俯仰される間にあるが、この眉山に立って昔日を追憶しながら新しく建設されている市街地を目のあたりにする時、不思議な感動を覚えるのである。

いかなる文献を調べても袋井用水計画については島田、庄、蔵本の3村300町歩にわたるたんたん打続く平坦農村の田畑とあるだけで、その水量とか延長とか構造とかの事業内容は知る由もないが、その受益地だけは各圃場に結ばれている水路が十分あり、これが排水路として役を果たすため開発行為の許可が出やすいのか、次第に都市的傾向を帯びるようになって、住宅あるいは工場病院等が増加してきた。昭和15年ころから用水の取入も従来からの自然あるいは水車等によるものから小型ポンプの普及によって自然灌漑の姿が次第に減少した。農家自身が従来の湧水流水に対する観念が次第にうすらぎ関心が遠くなってきたものであり、これに加えていずこの例に洩れず、この地域一帯も農家非農家の混住化が急速に進んで必然的にこの生活廃棄物によって水は濁り魚は逃げ、また鮎喰川の水流水脈の変化も手伝って昭和35年ごろから湧水は極度に衰えて水源池の水は腐り、水路は雑草が群生してしまい、かつて狂喜の涙したこんこんたる湧水の姿は見られなくなってしまった。

昭和46年5月都市計画法による市街化区域と化してからは吉野川右岸一帯海岸線に至るまでコンクリート建築物が林立し、大型道路は縦横に耕地をつぶし、住宅は軒を並べるに至った。その間に点在するわずかの水田畑地等も食糧生産、農家経済を支えるものでなく、あたかも開発の時の来るを待つ如く感じられるものである。枯渴が進んで湧水が減ること、開発が進んで受益地が減ること

とに起因して既設施設の維持管理費の増大に耐えかねて、井戸水および小型揚水機に切替えてしまうべく成立した島田土地改良区*も、その建設費の償還も終わった今日、解散して袋井用水と直接の関係無くしたことは時代の流れとはいえ淋しい極みである。

昭和57年8月徳島新聞に「袋井用水に再び清流を」と題して袋井用水を守る運動が起きていると報じられたが、徳島市鮎喰、名東、島田、蔵本、庄など7町内会の有志が結集、加茂名公民館が中心となってこれを展開していくという。市街化建設の息吹きの高い活気に満ちた地域ではあるが、この施設に今後とも多少でも関係する者は、立派に現存する史蹟と、先人の偉徳の顕彰と石碑に刻文されているように報恩感謝の念を子孫に伝えなければならぬ。「百年河清を待」っても袋井の水は清流に戻らないのだろうか。

3. 鮎喰川余聞と袋井用水水脈の考察

徳島県郷土誌の宝典で文化年間に阿波藩儒員が完成させた阿波誌がある。その名東郡山川の部は次のようである。

(1) 鮎喰川、源は名西郡上山村普殿に出づ又比溪北より入り左右溪南より入る阿川広野入田及本郡一宮名東岩延等を経て高崎に至り芳野河に入る長さ七里許り或は曰く郡に鮎喰祠あり因りて名づく。(注：流域約200km²、比流量0.10m³前後と推定)

(2) 田宮川、源は名東々村を出て蔵本矢三を経て田宮村に至り新街川に入る。

さて、鮎喰川の川筋はどう流れていたのだろうか。徳島市加茂名小史に、僧都の岩盤に当たった水は山に沿って

* 島田土地改良区は昭和27年7月島田普通水利組合から同土地改良区に改組す。組織変更許可徳島第185号、袋井用水維持管理、揚水機新設事業を目的としたが、昭和51年5月解散議決、昭和51年6月解散許可申請、同51年9月徳島県告示第693号を以て解散公告、解散時組合員数70名。

山麓を東流し峰薬師付近で二又に分れて二股の地名を生み、一つは佐古川に合流し一筋は名東郡を経て蔵本矢三を通る田宮川に入る。さらに名東島田両村とその対岸早洲和田岩延の各村との間を流れる川筋もあって、結局三筋の流れがあったと思われる。

また、徳島城と町の歴史には、田宮川は明らかに鮎喰川の旧河道であり、また眉山寄りにもその山麓を流れる佐古川も、最も古い河道であったと考えられる、とある。これらの川筋が阿波誌に示すような現在の河道にいつなったのだろうか。

天正年間、豊公の四国征伐の功によって蜂須賀家政が阿波に入国したが、その家政が徳島城下町編制の一つとして天正13年ごろ、鮎喰川の狂い水は不要として僧都の地で川の流れを断ち切る堤防工事を行っている。この堤防は逢庵堤（ほうあんつつみ）と称されているもので、蜂須賀家政の称号を名付けたものである。おそらくこの築堤以降に現鮎喰河道が定まったものと思われる。この堤防によって山麓の流水と中央の流れ川床は後年新田として開発されたが、とくに中央の川筋は元禄の世に至って楠藤吉左衛門が死を覚悟し神仏の冥助を得つつ開削に成功した袋井用水の水脈水源となっていると考えてよいのではなかろうか。

また、吉左衛門の水探しはどうだろうか。幾多の文献から考え合せてみると、はじめは島田村の豪農としての自分も含めて豊かな水田としたい願望から五人組などと計って水、水、水と求め歩いた。その結果、自村だけではなく次第に隣村にも足を延ばすようになり、土地の庄屋などの協力をこらたものであるが、表流水は適当なものが見当らず、一時は失望したのであろうし、この失意によって協力者も次第に去って、おそらく最後には一人ぼっちになったであろうと推測される。水利施設への意志はますます固くなっていったのであろうが、名案はそう容易に浮んだとは思われない。固い意志と神仏の冥助を祈る中にふと思いついたことは「地表水が無ければ地中を流れる水」ということではなかったろうか。おそらくこの名案に気付いて狂喜した吉左衛門は、まず幼年時代から伝え聞いた鮎喰川の古い流れのことであったと思う。その場所を求めて早速少なくなった同志を説いて各戸の井戸水を調べつつ一層幅広く、島田村から鮎喰川上流へ上流へと湧水地を探索して歩く。すなわち、昼は低地を試掘し、夜は田畝の間に臥して静かに伏流の音を尋ねる。このうちにはまた同志も去って一人狂人扱いをうけつつの苦節であった。

誠心の発露、神仏の加護、靈感の昂揚等すべて凡事に勝りて遂に鮎喰川に近く街道往還の南側に湧水状態の跡

を呈し声等水草の叢生する湿地、すなわち天正の昔まで流水湧水のあったとされる田宮川最上流の源と思われる現袋井の水脈水脈を見出して歓喜しただろうと考察することは早計だろうか。

なお、このことは明治年間の阿波叢書阿波偉人伝に「清水湧き蒲芦叢生を見て往時の鮎喰川脈を考へ洩溝を穿ち田圃の灌漑に便せんと欲す」ともある。

III. 楠藤吉左衛門の人間像

1. 楠藤家の信仰心

徳島県には5カ所詣りと称し四国88札所中の5カ所を遍路参りする風習があるが、明治41年発刊の阿波名所案内にはこの5カ所詣りについて次のように書いている。

「世に5個所詣りと称し17番井戸寺から観音寺、国分寺、常楽寺（いずれも鮎喰川左岸）、13番大日寺（右岸）等の四国霊場88ヶ所中の5ヶ寺に詣づるの慣い今も昔も異らず、これ別項袋井養水を穿ちて数百余町歩の田園に給水の設備を完ふした島田村楠藤吉左衛門が此工事の為父祖伝来の田畑19町歩を始め多大の家財を殆んど費消し尽したるも豪も意に介せず自ら謂ひらく、至誠未だ足らずと、5ヶ所の霊場参りすること正に100日、其満願の夜袋井に好水源池ありと夢み、同所を穿ちて漸く其素志を達したれば100日々参の記念として光明真言一百万遍供養の碑を国分寺境内に建設したるは実に享保5年の事なりき、爾来吉左衛門の遺徳を仰ぐ者其墓前に香華を供すると共に、吉左衛門に倣うて5ヶ所に参詣し遂に一般の習俗とは成りしなり。」

また、加茂名小史には「由来楠藤壹家は信仰心が深かったようで吉左衛門の父次郎太夫は寛文7年檀那寺の島田本願寺へ金銅の密教法具である金剛盤並に鈴鉢を祖先供養のために寄進しており、又孫の繁左衛門が安永6年に氏神の八幡神社に袋井用水全事業の完成と名字帯刀の許しを受けた記念に石造の大天燈籠を奉納している。」

以上のように5カ所詣りは吉左衛門が創始のように記されていること真偽は別としても、当時の楠藤一家は信仰心深く、吉左衛門の頌徳碑文にいう神仏の冥助を得、多くの文献に記されている靈感霊夢を得るといふ素養は家ぐるみ備えていたものと思われる。

2. 楠藤家と吉左衛門

先祖は元龜2年（1570）に河内国から移り島田村で農業を営んでおり、この先祖は佐藤姓を称している。したがって、吉左衛門が活躍したころは詳しくは佐藤吉左衛門と称すべきである。改姓の理由は安永5年（1775）吉左衛門の孫に当る繁左衛門が袋井用水の完成を期して藩庁に願書を差出し名字帯刀が許された時、南朝の忠臣楠

木氏と何かの関連によって楠藤姓に改められたと思われる。

資料 I 名東郡史による楠藤家系譜

①五郎左衛門（佐藤姓）—②五郎右衛門—③五郎次郎—④次郎太夫（5人組肝煎）—⑤吉左衛門（肝煎）—⑥善平—⑦繁左衛門（5人組楠藤姓）—⑧吉左衛門（庄屋）—以下略（注：袋井用水創始者は⑤の人物）

資料 II 名東郡島田村棟付改帳（吉左衛門の項以外略）

- (1) 万治元戌年12月3日認 高71石1斗9升6合
 - 1. 壹家 本百姓 次郎太夫 歳27
壹人 次郎太夫子 本ん（吉左衛門幼名）歳6
- (2) 延宝2年寅極月21日認 高67石9升5合
 - 1. 壹家 本百姓 次郎太夫 歳43
壹人 次郎太夫子新兵衛（本ん改名）歳22
- (3) 享保9甲辰年5月27日認 高82石3斗1升5合
 - 1. 壹家 本百姓 吉左衛門（本百姓相続後）歳71
壹人 吉左衛門子 善平 歳42

以上のとおり吉左衛門は次郎太夫の長男であり、この棟付改は女子は記入されない例のため、他の弟妹は判然としないが6人といわれる。幼名は本ん、成人して新兵衛、本百姓相続後は吉左衛門を名乗っている。

資料 III. 島田村上位石高別並身分（棟付帳から整理）

| 順位 | 萬治元年 | | 延宝2年 | | 享保9年 | |
|----|---------|-----|---------|-----|--------|-----|
| | 石高(石) | 身分 | 石高(石) | 身分 | 石高(石) | 身分 |
| 1 | 123.687 | 本百姓 | 111.912 | 本百姓 | 94.242 | 肝煎 |
| 2 | 93.287 | 〃 | 91.669 | 〃 | 82.315 | 本百姓 |
| 3 | 71.196 | 〃 | 67.095 | 〃 | 57.747 | 〃 |
| 4 | 56.586 | 〃 | 66.953 | 〃 | 49.856 | 〃 |
| 5 | 55.024 | 〃 | 55.024 | 百姓 | 44.627 | 〃 |
| 6 | 54.273 | 〃 | 53.583 | 〃 | 38.433 | 〃 |
| 7 | 50.377 | 小家 | 50.000 | 〃 | 38.255 | 〃 |
| 8 | 50.000 | 本百姓 | 47.036 | 〃 | 29.786 | 〃 |
| 9 | 47.850 | 不明 | 40.265 | 小家 | 25.485 | 〃 |
| 10 | 43.725 | 奉公人 | 40.000 | 〃 | 25.248 | 〃 |

注) 太字は楠藤家

以上の各資料のように楠藤家は島田村で有力な本百姓であり、その実力は常に最右翼であって村役人となる格式を常に備えていたことがわかる。当時は格式を備えた名家を役家と称して、村役人はこの役家から出る慣しとなっていた。楠藤家では系譜に示したように四代以降村役人となり、先祖代々庄屋を勤めていたが、吉左衛門から数代後に事故を起して衰微したことが名東郡史に示されている。

楠藤家の住所は、阿波国名東郡島田村中分郷（現徳島市中島田町4丁目）で吉左衛門は承応元年（1652）の生れで享保9年（1724）73才で同所で没す。戒名は「英悟浄覚信士」、墓碑は先祖代々現徳島市中島田町4丁目泉

道北側にあつて、これは旧楠藤家邸内墓地と思われる。

3. 島田村と村役人としての吉左衛門

吉左衛門が73才を過ぎた島田村は西と北側を鮎喰川が流れる吉野川南岸沖積扇状地の先端で面積およそ1.5km²の小村で南部低地の水田、北部高地の畠と鮎喰川敷の3部分であったと思われる。袋井用水以前は吉左衛門一家も含めて、わずかな鮎喰川の湧水や溜り水を求めて農作に苦勞していたので平穩時の鮎喰川清流を朝夕眺めて、やるせない気持であつたと思われる。

吉左衛門がいつ島田村の村役人を勤めたかは明らかでないが、元禄5年から袋井用水水源池開鑿を申請し、同7年に許可があり、また宝永6年肝煎と記した文書もあることによって元禄当初から宝永中ごろまでの20年前後在勤したと思われる。名東郡史に庄屋と肝煎について「肝煎とは……一般の通語では肝煎庄屋というべきで、拝知百姓から選出された庄屋を肝煎という」とあり、吉左衛門一家は早くから徳島域下眉山山麓の瑞巖寺の拝知百姓である。由来阿波藩では庄屋肝煎を特定の一家が世襲することが少なく、適任者を当てたことが多い。島田村でも本百姓が交替で務めている。有力な本百姓家に生れて肝煎候補者として村中から囑望されていた吉左衛門が不惑の40才で出番となつておよそ20年の在職は最も円熟した活動力のある年代であつた。島田村の用水不足は楠藤家文書の「乍恐奉願」中に「当邑西南の無堂寺という所に用水があるが、水量非常に少なく早魃強く田作には適せず年貢等も年々相育難く百姓全体至極難渋しているが、次郎太夫伴吉左衛門用水の儀に付いて彼れ是れ考え合せ」とあつて、吉左衛門は早くから用水開鑿計画をたてたが困難な大事業のため、藩の援助と島田村農民の協力を訴え続け、そのため肝煎という役が必要でかねてからその日を待ち望み、肝煎となるや早々とこの用水問題と取組み各方面の協力を得て水源池の探索を始めた。



図-3 ついに掘りあてた水源にどっと上る歓声、奉行もかけつける

ついに元禄五年に適地を見出して設計の上、水源池開墾許可申請も差出し、同7年に許可を受けて工事に着手し、苦節7年ついで元禄12年にこの大工事に成功した。その後も用水路造成を行ったが、この間の苦心さんたんもさることながら、肝煎という村役人職、公職があずかって大きかったことを見逃しかてはならない。

資料IV. 島田村棟付帳よりみた当時の村勢

| 年 代 | 戸 数 | 人 員 | 備 考 |
|-------------|-----|-----|---------|
| 万治元年 (1658) | 69 | 188 | 吉左衛門 6才 |
| 延宝2年 (1674) | 76 | 264 | " 22才 |
| 享保9年 (1724) | 86 | 212 | " 72才 |
| 安永5年 (1776) | 100 | 250 | 孫の繁左衛門 |

農地面積、収穫高が見出せないのが残念であるが、上表の棟付帳は農民の男子のみであるから村の人口は女子を男子の80%とし、他に武士階級など約40人と考えると約500人位が河川敷を除いたおよそ1km²と思われる土地に居住していたことになり、密度は高く飽和状態であったと判断される。また耕地開発面積は同じく棟付帳から計算すると、寛永5年から宝永5年までの84年間に約8町歩、宝永6年から政寛10年の83年間に約25町歩の開墾が行われているもので、元禄年間以降通水された袋井用水は島田村開発に大きく貢献していると思われるし、他の各村も資料は見当たらないが、島田村同様であったと思考される。

かくして徳島城山の構えを間近に望む島田村の藩の農村政策なり、あるいは徳島城の勢力と城下町の発展に伴い各主要街道の通過する軍事、経済等交通の要衝地ともなっており、俗にいう徳島城御山下21ヶ村の1村に加えられている。

IV. おわりに

楠藤吉左衛門は江戸中期の封建制度展開期にあって、島田村農民として生れて以来ほとんど村を出ることはなく、百姓の身分で一生涯を終った。一口に言えば平凡な農民であって、書簡、日記、その他記録等も残されておらず、そのほどを知ることは困難である。

格別高邁な思想精神の持主ではなかったと考えられる。しかし当時の儒教的精神は持っていたのではない。吉左衛門が深く儒教を研究していたとも思わないが、身分の上下関係の道徳尊重などを常に持っていた人であったろう。袋井用水の開削も藩や農民のために自分に課せられた道であると思込んでいたに違いない。

また、当時の農民の代表者としての一般的教養は十分持っており、当時の藩への申請書等の作成、許可等の書算の解説等の読書力、年貢賦課徴収等の計算割付等い

ゆる読書算術には一応通じており、また、土木技術はかなり研究していたと見るべきで、検地には肝煎として案内役をして測地測量など学びとっていたと思われる。袋井用水開削当時は各地に河川普請、用水造成あるいは鉱山採掘等があったことを見聞して、用水源を鮎喰川伏流水に求めるなど素養があって実行したことであろうし、この掘削に要する道具、材料、土砂の捨て方あるいは池の石積柵工等については早くから心積りがあって計算されていたものと思われる。

さらに用水開削工事が大変困難な事業であることをよくわきまえ、藩と島田村農民一同の協力援助によらねばならぬと強く思い、早くからその日に備えて両者の間に万事円滑に事を処して協調協力することを心掛けていたに違いない。村役人となったことは本当の適役であり、島田村民の理解の外に、庄村を通過し、東名東村で水源池を造成するという他村での交渉の難しさに成功し、また予想外の難工事にも全くくじけず、藩当局のきつい不興も鎮静しつつこの難事業を完成させたことは、吉左衛門の人柄と役柄に負うべきものが多く、平凡と思われる中にもあくまでも所信を貫く不撓不屈の精神力の持主であった外に、協調の精神に徹した人物であったと思われる。

名東郡史中に次のような一文がある。「其頃同村に伊右衛門なる者有り、吉左衛門の同志として用水に尽力し袋井下流を開墾し云々」とあるを見ても、吉左衛門の儒教的あるいは協調的精神に傾倒して協力も続けた同志もまたかなりの数があったと思われる。誠に平凡な土臭い農民精神の中にも人をして倦まざらしめる自然の人格を備えた人物像が描かれるのではなからうか。

春は里に生れて野から山へと移る。秋は山に育って順次里へ、街へとその輪を広げてくるように思われるが、信念を貫き目的を達した先覚の老農は今、この春風にたわむれつつ、あるいは秋の味覚と豊穡の色香を賞味しつつ道程12kmの五カ所巡拝の遍路道を行く。鈴の音も、またその心も足も軽やかに進む楠藤吉左衛門を偲びつつ思う。昔用水、今は排水とその先覚者感覚も時代とともに移りつつあるということ。

引用および参考文献と協力者

- 阿波藩：阿波誌、明治年間：阿波叢書及阿波名勝案内
- 名東郡自治協会：名東郡史 (1860)
- 徳島市役所：徳島市史 (1973)
- 福井好行：徳島県の歴史 (1972)
- 河野幸夫：徳島城と町まちの歴史 (1982)
- 徳島史学会：徳島歴史散歩 (1972)
- 加茂名史編集委員会：加茂名小史第1、2集 (1981)
- 徳島県小学校社会科教育研究会：私達の徳島県 (1981)
- 徳島県耕地課：播 嘉祐 徳島農林事務所：元山 実

[1982. 11. 1. 受稿]